

巻頭言

学術総会雑感

久住一郎 日本精神神経学会副理事長
Ichiro Kusumi

本年6月に開催された第113回学術総会名古屋大会は、尾崎会長の主催で6,500名を超える参加者を集めて、成功裡に終了した。専門医制度の導入に伴い総会参加者は増加の一途をたどり、最近5年間は6,000名以上で安定している。また、大会長が明確にテーマを示し、それに基づいたプログラム作りがなされているゆえんであろうが、その内容が年々充実してきていることも疑いない。さらに、委員会シンポジウムにおいて時宜にかなった充実した議論が行われることも本学会の特徴である。以下に、私が所属している委員会関連プログラムの中から、名古屋大会で感じたことを思いつくま点描してみたい。

倫理委員会シンポジウム「精神医学研究における倫理課題——個人情報保護法改正と倫理指針改定を受けて——」では、ゲノム研究、疫学研究、そして法学の専門家をシンポジストとして招き、現段階における精神医学研究の課題について議論した。特に、その扱いが宙に浮いた形になっている症例報告については、病歴という個人情報をどの程度まで個人を特定できない形にし得るかのコンセンサスは難しく、守秘義務のある職種のクローズな会以外では、患者本人から同意を得ることを原則にせざるを得ないという印象をもった。そうすると、一般の方も電子書籍版を購入可能な本誌の投稿規定は、それに準拠したものにならざるを得ない。また、発表の本人同意を原則にできなければ、今後、本総会における症例報告発表の場をクローズにすることも考慮しなければならないであろう。

PCN編集委員会シンポジウム「生物学的精神医学のフロンティア」では、4人の世界的に活躍している研究者が最新の生物学的精神医学研究の進歩を紹介し、その成果を実際の精神科臨床につなげていく道筋についても議論された。この内容は、本誌で特集が組まれるが、そのハイレベ

ルな内容には非常に感銘を受けた。従来であれば、各専門領域の関連学会でしか聞くことができない内容が、「親学会」たる本学術総会でも取り上げられるようになったことは、今後の関連学会のあり方に一石を投ずるとも思われる。これまで長い歴史を経て多数設立されてきた関連学会の再編を真剣に考える機は熟しつつあるといえるのかもしれない。

同委員会関連の教育講演「学術出版の現状と展望——PCNの役割——」では、加藤編集委員長が学術誌の意義や現況について解説し、PCNを育てるための種々の取り組みを紹介した。会場には若い研究者の参加が目立ったことは印象的であった。PCNの2016年Impact Factor (IF)は2.063であるが、さらに内容を充実させ、将来のIF=5をめざすために、査読基準の明確化、査読のスピードアップ、若手研究者と編集委員の交流促進、PCNを育てるPIワーキンググループの結成、特集設定による投稿促進、著名研究者への総説依頼などの様々な工夫に取り組んでいる。何より、日本人が安心して投稿でき、結果として、その論文が適切に引用される好循環が生まれることをめざし、本学会員に周知することを目的に、abstractの日本語訳を本誌やPCNのオンライン版に掲載し、本学術総会期間もPCNブースを設置して、編集委員やPIワーキンググループが投稿に関する相談を受けた。最近、査読期間が非常に短縮しているため、学位論文の投稿にもPCNを積極的に活用できるであろう。折しも、名古屋大会で特別講演をされたAmerican Journal of PsychiatryのFreedman編集委員長と神庭理事長との交渉で、同誌とPCNの間で相互のコンテンツ掲載を行うことが決まり、今後、PCNの国際的認知度がさらに増すことが期待される。